

八

九

人・古・來・不

榮井壺

中央公論社

おこまさん 奥付 ©

昭和三十四年七月三十日初版
昭和三十四年八月二十五日三版

著者 壺井 栄

発行者 栗本 和夫

印刷者 大橋 貞雄

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
振替番号東京三四番
共同印刷・小泉製本

検印廃止

定価 二九〇円

おこまさん

序 章

おこまさんはその名のように、ひどく小ぶりなからだをしている。小ぶりなのは生まれつきで、なんでも生まれたての時、四百三十目しかなかったという。約半人前の目方だ。彼女の両親たちはすっかり悲観してしまつて、

「こんな小まい子が無事に育つかどうか、しれたもんじやない」

と、心配のあまり、はじめから投げているのをみて、祖母のおたみさんは憤然とし、

「なにをいうぞいの。小んまく生んで、大きく育てるといふじやないか。育ていでどうすりや」

といい、子育て役の半分を母親から奪いとつてしまつた。

人工栄養だったからできたことだった。祖母は名前も自分のをくれてやり、だからおこまさんの戸籍名は多美子であるが、この小まいの、小まいのと可愛がられてる中に、こまちゃんになり、やがておこまさんになってしまつたのだそう。きかん気なところは祖母の影響らしい。世間によくあるわがまま育ちは、青春時代のおこまさんを多少無軌道にしたらしく、彼女には大きな秘密がある。しかし、それを知っているものは、今のところおこまさんのまわり

にはいない。なにもかも承知の母親が亡くなり、なにもかも承知の上で結婚した夫に死なれてしまつたおこまさんは、もうだれ一人頭の上らぬ人はないと思つてゐる。

そんなことが、おこまさんのん気にさせたのか、このところやたらと若やいできた。つやつやとからだに肉がつき出したのだ。とはいつても、目方は十二貫そこそこというのが正味だろう。なにしろ背が低い。四尺八寸と自称してはいるが、二分ほど足りないのが正直なところだ。

それでもおこまさんにとつては、小さくやせっぽちで過ぎた若い日のコンプレックスを、今になってとりかえしたほどの氣もちであるらしく、風呂上りの時など、まるで若さに見とれてでもいるように、鏡台の前を動かかなかつたりする。もう年で、疲れもあるのだが、娘の萱子かやはそれをほどよくからかうすべをしつていた。

「うっとりしてるじやない、おかあさん」

するとおこまさんは急に眉根をよせ、

「また馬鹿なこと」

「だって、そうしてるとこ、なかなかいけるわよ。まだまだ捨てたもんでもないわよ。そう思ってるんでしょ」

「ああ、なんなといいなさい」

「だって、そうして丸っこい手の甲にまでクリームぬつたりしてるとこ、まるで自信満々よ」

さすがのおこまさんも、ついふき出してしまい、

「中年ぶとりなんて、いやだね。みっともなくまん丸くなるんだもの。そう思つて呆れてるところさ」

「なにいつてんのよ。うれしそうな顔してるくせに」

何度もささい水をそそがれては、悪い気もしないらしく、おこまさんはとうとうのせられてしまい、

「まんざらでもないかね」

萱子はわざとぷつとふき出し、

「それが、いいかつたんでしよう」

食うに事かかぬのんきな母娘ぐらしのせい、か、萱子はいつも母親を友だち扱いするくせがあった。

「ねえおかあさん、恋愛するなら今の中よ」

するとおこまさんもまにうけたふりで、

「そうですかね」

やはり鏡の前から立ち上れないのは、生まれつき薄い眉を描かねばならないからだ。しかし、いくらなんでも、萱子の前ではそれがしたくなかった。

「萱子、早くお風呂になさいよ」

ていよく追っ払いたいのに、萱子の方は一こう気がつかぬ様子で、

「わたし、お風呂よす」

「どうして」

「恋愛する気、ないもの」

「じゃうだんいわんと、さつとひとあびしておいでよ」

「そこが、そうはいかないのよ」

それでやつと察しのついたおこまさんは、思いきつて、まゆずみを手にし、すが目で鏡に顔を近づけながら、

「まったく年はとりたくないよね。もう目にきたらしい」

「へえ、老眼？」

「だろうね。これじゃあ、恋愛どころでないよ」

「だって、老いらくのなんとかつてこともあるじゃない」やつと眉をひきおえてちやぶ台に向いあつてすわりながら、

「萱子はまた、なにかこんたんがあるんだろ」

「どうしてよ」

「いやにおかあさんを邪魔にするんだもの。ひがむよ」

「いやーだ。なぜよ」

「おだてておいて、邪魔ものをおん出すつもりだろ」

萱子は今度は本気でふき出し、

「おかあさん、いいところあるわ。たのもしいわ。おいらくどころじゃないわよ。そこまで飛躍できるなんて、大した若さよ」

そして、てれているおこまさんを、更にひやかした。

「ほら、あかくなつて。それなら、大丈夫恋愛できてよ。フレ、フレ」

「じゃうだんもここまでくると、おこまさんも負けてはいられない。」

「じゃあその気になるかね。四十やそこらで後家になったんだもの、残りの青春がかわいそうじゃないか」

「しゃれたこと、おっしゃるのね。それが本音でしょ」

萱子はくすくす笑い、

「お母さんいくつ。六だったかしら」

「じようだんじゃない、四だよ。今流にいえば」

「あきれた。じゃあ、あと半月で五じゃないの」

おこまさんは、はっとした。このごろ、なんとなくそわついて、ものほしげな自分の胸の中を、見ぬかれたような気がしたからだ。もうこのへんで話題をかえようとおこまさんは思っているのに、萱子の方はなかなかしつこく、

「ねええおかあさん、この際お聞きいたしますがね、お母さんとお父さん、恋愛結婚でしょう」

「なにをまた」

おこまさんはむっとした。しよつちゆう、じようだんばかりいつている萱子ではあったが、いくらなんでもこんなふうについてほもらいたくない気がしたのだ。亡くなった夫の松三郎との結びつきというのが、萱子の想像とはまるで反対だったからでもある。いわゆる見合結婚でさえもなかったと、正直なことをいつてみたところで、萱子はそれを信じはしない。それというのも、萱子が、父母の結びつきをしりたがり出したころ、何度かの質問にこたえて、おこまさんは、

「お父さんがね、病身だろう。気の毒になって、お嫁にきたのさ。同情結婚というのかな」

少女期の萱子はそれをまにうけて、その度に感動を示し、

「おかあさんて、天使みたいな人ね。だってわざわざ、せむしの人の嫁さんになったんだもん」

ところが、実をいうと、たった一度の見合いで、結納も交さずに、その翌日はもうせむしの男の妻になっていたのだ。京都の伯母の紹介であった。ある事情で見合いをさせながらも伯母は、当然おこまさんがことわるにちがいないと思い、それをそうにいったことで、おこまさんのあまのじゃくは、逆の方向へ突進してしまったともいえる。

「こまちゃん、いくらなんだって結婚は一生のことなんだから、もっとよく考えなさいよ」

と、まるで仲人の立場を忘れていうのへ、

「へんなの。じゃあ、なんで見合いなんかさせたのよ。私に似合いの人だと、思ったからでしょう」

涙もこぼさずにそういったのも、そのころ失意のまっただ中であつたおこまさんの、自分をなげた姿だったのだ。どうともなれと、やけのやんばちで、わざとせむしの男にからだをくれてやったのだ。おこまさんはわざとだれにも相談なしに好きでもない男のところへ押しかけていったのである。だれにともなく、すべての人への面あてのような気もちがそうさせたのだが、まるで、そんなやけむちやな

どと無関係のように萱子が生まれると、急に忘れものをつりもどしたようになった。子供のかわいさが、夫婦のつながりを新しくしたのだ。不具の松三郎は、一にも二にも、おこま、おこまで一生涯を閉じた。そんなことも若い萱子の目には美しい恋愛の極みのようにうけとれたのかもしれない。彼女はいたずらっぽく、

「だって、へんなんだもん」

とおこまさんを見、

「私、感じたのよ」

「なにをさ」

「恋愛結婚のこと」

「じょうだんはよしなさい」

おこまさんのはげしい剣まくに、一瞬たじろぎをみせた萱子だったが、しかし萱子もどこかが母親に似ているのだ。どなられたぐらいでだまってすごすごと引っこむわけにはいかない。さすがにもう、めんと向つての太刀打ちはさけたが、負けん気なひとり言だけは遠慮しなかった。

「なにさ、残りの青春なんて、口ばかり新しがつていても、恋愛をまだお家の法度だと思つてゐるのよ」

そういわれると、おこまさんも一言なしではいられない。「あんまり、萱子がしつこいからさ。人をからかうにもほどというものがあるんだから」

きげんのなかつた声で、茶の支度をしかかった。

「からかつてなんか、いないわよ」

萱子もあつさり笑顔になり、

「私は、昔からおかあさんを尊敬してるつもりよ」

「おやおや。こんどはおだてるのかね」

「ううん、ほんとのことを聞きたかっただけよ。ね、おかあさんはいつだって、一方的におとうさんから熱望されたようにばかりいうでしょう。そんなことって、あるかしらとこのごろ思いだしたのよ、私」

「どうでもいいじゃないか、そんなこと」

「ところが、どうでもよくないのよ。もしも、ほんとにおかあさんが、おとうさんと愛しあつて結婚したんだったら、萱子の尊敬はもっと深まるんだだけだね」

おこまさんはてれ笑いの顔で、急須に湯をそそぎながら、「よくもまあ、そんな齒の浮くようなことを平気でいえるね。それが今どきの若いもんですかね」

萱子の方へ茶托をすべらすと、萱子は即座に、

「あら、いれ齒でも浮くの」

そして自分の言葉にふき出してしまった。おこまさんもらい笑いをしながら、思わず美しくならんだいれ齒の口許を左手でかくした。そんな母に、萱子はなおもくいさがるように、

「おかあさんて、とにかくかわいらしいわ。私の断ずるところ、美しき恋愛の花を咲かせ、そして実を結んだ——」

「おあいにくさまだね」

「あら、その実が私じゃあなかったの？」

「すまないね」

「そうお。とすると、わが母はいやしむべき女というわけかな」

「どうしてさ」

「財産に目がくれて、せむしの男の妻になった……」

「萱子！」

眉をよせながら、おこまさんは内心ぎよつとするものがあつた。あのときの気持ちを平静に分析してみれば、そんな答えも出かねないと思える。相手に一生食うに困らぬだけの財産がなくても、若い身空ではたしてせむしの男の妻になれたかどうか、甚だ疑問だからだ。

——いっそのこと、萱子になにかもうちあけてしまおうか。

右手にもった湯呑みを、左のてのひらに預けたまま、考えこんでいるおこまさんの、少しばかりとり乱した気もちを、萱子はまるでとりつくろつてでもやるように、

「ごめんなさい、私のいいすぎだと思うわ。とり消すわ」

それをきくとおこまさんは急にむらむらとなり、

「なにもとり消さなくてもいいよ。どうせ、昔の女は、そんなようなものさ。外面如菩薩内心如夜叉とかつてね」
「しよつてるわ」

萱子はまた笑い出し、

「相当の心臓ね」

これにはおこまさんもびっくりした。いわばへり下ったいい分のつもりなのに、娘はそれを心臓だという。若い萱子は、よくいわれる戦後のいびつな教育をうけて、外面如菩薩の意味をよく知らないのではあるまいか。だが、そうではないことが、おこまさんにもすぐわかつた。

「おかあさんみたいお人よしの、なにが如夜叉なのか」といったからだ。

「ああ、なんなおい。夜叉なと菩薩など」

そして、こんな娘に、昔の秘密などうちあけてなるものと、あらためて心に戸をおろしてしまった。しかし萱子の方はひどく無邪気に、

「でも、うちのおとうさんで、仕合わせだったのね。やさしいお嫁さんに一生つかえてもらつてさ、羨やましいみたい」

「なにも、羨やましがる筋合いじゃないじゃないか」

おこつたようにいうおこまさんに、萱子はからみつくような調子で、

「ちがうわよ。おかあさんが、うらやましいのよ」

「おかあさんが」

「おかあさんみたいに、私もなりたいんだ」

おこまさんはまたはつとする。とにかくつきからの萱

子は、普通ではないと、やっと気がついた。どうやらこれは、ただごとではない。

さめかけた茶を、一口にぐつと飲んで、じつと萱子の顔をみつめると、はたして萱子はまちかまえていて、

「おかあさんに、相談があるんだけど」

「相談！」

「あつてもらいたい人が、あるのよ」

平静をよそおってはいたが、おこまさんの内心は、たぎり出していた。ついにくるものがきたという思いと同時に、下手をしては、失敗のもとと、自分を押える冷静さもあつた。

「結婚でも、したい相手かね」

へらず口ばかりたたいていた萱子も、さすがに神妙な顔になり、

「まあ、そうね」

松の荘

夫の松三郎のまだ生きていたときだった。もうねたきり動けなくて、一刻もおこまさんをそばからはなしたがらなくなっていた松三郎は、まるで余命を予知してでもいたように、おこまさんの将来を案じ、

「なあおこま、何ぞ商売でもするかい」

この、なあおこま、がはじまる前は、むつりだまって考えこんでいるのがくせだったから、「なあおこま」はそ

の考えの結果がはき出されているのだ。

「また、おとうさんの、とりこし苦労がはじまった」

そんなふうに、気がるに聞き流したいのがおこまさんの気持ちで、まともに相談にのつたところで、この病人をかかえてどんな商売ができると思えなかった。しかし、三度に一度は、夫の計画にまじめに乗った顔をしないことには、あとがうるさい。どうせおれのような癡人は、早く消えろと思つてゐるだろう。などとひがまれたりするからだ。「商売つたつて、今更、どんな商売が出来るでしょう。私には、商売の自信なんて、かけらほどもないんですがね」「そうかね」

松三郎はがっかりしたようにいい、ややあつてから、なかばおだてるように、

「しかしね、お前さんなら、なんでもできるよ。人に好かれるとこが、あるさかいな。客がよってくるぞう」

田舎言葉でいうときは、機嫌のよいことを語っていた。

「いやですよ。一たいおとうさん、私になにをさせたいんですか。一ぱいのみやでも、やらせたいんですか」

すると松三郎は、それをまともにうけて、

「そりやあいかん。のみやはいかな。萱子のためにも悪いじゃないか。もつとかたい商売が、あると思うな」

「じゃあ、金物屋でもやりますか」

それをまじめくさつていったことで、松三郎は笑い出し、

「お前はどうも、すぐそんなふうにな茶化そうとするがね、やっぱりもう、もつとまじめに考えた方がいいよ」

おこまさんも、笑いながら、

「でもねおとうさん、商売商売とおっしゃいますが、なんだってそうたやすくはいきませんよ」

「しかしね、今から算段しておかんとお前、うかうかしてたら、親子で路頭に迷うようなことになるよ」

「大丈夫ですよ。萱子だって、その気になれば勤めにも出られるんだし、何とか、やっていきますよ」

「そりゃあいかん」

松三郎は寝たまま大きくかぶりをふり、

「萱子は、あてにならんよ。それに、あてにせん方がいいぞ。萱子は萱子、お前はお前で考えなくちゃあ」

「おれも、もうそうながくはないからね。と、おっしゃりたいんでしよう」

おこまさんは、からからと笑う。松三郎は一そうまじめな顔つきになり、

「お前はいつも呑気そうにいうけどもさ、おれは毎日毎日、そのことばっかり案じてるんだよ」

しかし、おこまさんはあくまでも呑気にかまねねばならない。一しよに悲愴がったりしよものなら、ことのはずみには、それなら一しよに死のうなどといいかねない松三郎だからだ。だからおこまさんは、とぼけたかっこうで、

「心配しないで下さいよおとうさん。私ももう、四十をいくつも過ごした女ですものね。自分の身さばきぐらい、できそうなんだと思つて下さいよ」

「そりゃあ、そうだがね、だからおれは、お前のために心配してるんじゃないか」

「どうも、ありがとう」

「おれの生きてるうちに、ちゃんとしとかんとお前、世間はそう、お前の思つてるほど甘くはないんだから」

「そうですか」

「四十をすぎたといつても、お前はまるで、子供みたいなところがあるからな。それがお前のいいところなだけけど、それを見ると、おれは安心して死にきれないよ」

おこまさんは内心ほろりとなる。なんという世間知らずな、お坊ちゃんだろうと、それで終るだろう松三郎の一生が、あわれでならない。おこまさんに若気のつまずきがあったらばこそ、馬鹿になつて、甘つたれて、呑気そうに装つてはきたものの、二十年の夫婦生活の中では当然見ぬかれていると思つたことも三度や五度ではないのに、このごろの松三郎には全然それがない。心の底から、妻の将来を案じているのだ。案じさせては罰があたると、おこまさんは思う。だからやはり、呑気そうにふるまわねばならない。「おとうさんで、ほんとに、気の毒ね。心配ばっかりして。だから、頭がだんだん禿げてくるじゃないの」

若い妻のように、松三郎のうすくなった髪の毛をなでる。萱子でもいれば、さっそく冷かされるころだ。

「頭もはげるさ。お前は自分の呑気さから、おれがいらいぬ心配をしていると思うのだからね、おれにしちゃあ、そんなどころじゃない。おれが死んだら、お前はどうするだろうと思つてさ」

ながい病人になると、こんなふうに軽々しく命のことをいえるものかと、おこまさんはいとしそうに夫をながめ、
「ほら、またおとうさんの十八番がはじまった。死ぬなんて、あてになるもんですかよ。病氣しながら何十年も生きてきたんじゃないの。こうなったら死ぬまで生きるんだつて、呑気に考えましようよ」

われながら馬鹿なことをいつてると気がつきながら、舌のはずみで、

「私も二十何年、看病してきて、すっかりこつをおぼえたわ。まかりまちがえば、どっかの病院の附添婦にでもやとつてもらうから。そうだわ。私の方針、もうきまつたわ」

そんなこんなで、居食いの一家はこのところずっと儉約を続けていた。それでもどちらかといえど恵まれた方で、戦争のもたらした経済的混乱の中で、家屋敷が残ったのは幸運の方だった。慾をいえば、貯えの金がせめて手持ちの倍ほどあればということだ。しかし、働きもしないで、それはあんまりぜいたくがすぎるといのが日ごろのおこ

まさんの考えであり、だから今の中に何とか方針をたてたいというのが松三郎の思惑である。

「なあ、こまや、大きな声ではいえないけど、どっかへ手づるを求めて、金貸しでもやるか。——そうでもしないと、お前、三年もたつたらあごの下、干上るぜ」

それを松三郎は、おこまさんの眼を見ないでいった。氣のとがめの大きさがそれでわかる。からだを動かして働くことのできない人間の、せい一ぱいの考えはこんなところへもゆきつくのだろうか。おこまさんはいつもの従順さに似合わず、このときばかりは、習性の柳に風と受け流したりはしなかった。おこつた声で、

「じょうだんにもほどがある」

そして、ながらくいた女中のひささんがひまをとつたのをきっかけに、あとは人をいれないことにした。買物から掃除から、一さいおこまさんが引きうけたのだ。普通ならへっちゃらだが、ねたきりの病人の看病もあることで、おこまさんは大車輪だ。見かねた松三郎はまた氣をもみ、

「それじゃあお前のからだだが、もつまいがの。女中一人ぐらい、つめたつてしようがあるまい」

ところがそうではなかった。おこまさんは、ここしばらくしなかった女中仕事をしてみて、目をみはる思いがしていたのだ。親身になってやってくれると思つていたひささんでさえも、これかとおどろくほどの無駄が、家計簿に正

直に現れた。しかしそんなみみっちいことよりも、何よりもつけの幸いだっただのは、永年病人によりそって暮らしてきたおこまさんの胸のつかえが、まるでつまったきせるを通したようにせいせいしたことだ。市場へ出かけていって、八百屋や魚屋に、いせいのよい声でむかえられたりすると、忘れものを出したような気になる。

「まあね、ひささんがいなくなってから、ごはんのおいしいこと。やっぱりからだは適当に動かした方がいいんですね。わたしやこうして動けるのが面白くて、たのしくて」
ねたっきりの松三郎にわるいと気がつくほど、いそいそと買物に出かけるおこまさんだった。そんなある日、松三郎はおこまさんの帰りを待ちかまえて、勝手口の戸があくなり、まだ顔も見せぬうちに、はりのある声で、
「多美子オ」

珍らしくほとんどの名前で呼びかけた。返事がないので枕もとのベル代りのコップをせわしなくたたきながら、

「おこまさん！」

と今度はまるで友だちでもむかえるような親しさだ。だが、顔を出したのは萱子だった。

「なんだ、萱子か」

てれている松三郎に、萱子はいたずらっぽく、

「わるかったわね、おこまさんでなくて」

それでもながい間の馴れで、横むきにねたままの病人と

向いあえるあたりにふとんによりそって静かにすわった。赤い洋裁かばんが、だいぶくたびれている。

「玄関から入ってこないからさ」

ふた親に似ず、坐っても背の高さを思わせる娘に、松三郎は妻にとはまた別の感情をよせながら、

「萱子も、ちっとおかあさんを手伝うてあげろよ」

「あら、いきなりお説教」

「説教だと思ふのか。このごろのおかあさんみろよ、女中もおかずにひとりやとてやってるじゃないか」

「だから、土曜日を遊びもしないで帰ってきてるじゃないの。手伝ってるつもりよ、これでも」

「台所からはいつてきたりしてな。ごまかしたって、わかるんだから」

自分のてれかくしをこめて笑うと、萱子もそれにのつて、
「いやーだ。玄関、しまってたのよ」

しまった、と松三郎は思い、急に話題をかえた。

「ところでな、萱子」

その生真面目さに、萱子は思わずひざをよせてゆき、
「ええ」

「遺言をしとこうと、思うんだがね」

ぎよつとしたが、それも長年の馴れで顔には出さず、
「また？」

「またと思うだろうがね、今日のは大分具体的なんだ」

「死んだあとのことなんて、どうでもいいじゃない」

「いや、よくないね。もしもおかあさんが再婚でもしてごらん。問題は複雑になるんだから」

悲愴な顔をしている。それをふっ消すように萱子はころ笑い出し、

「あきれた。おとうさん、そんなことまで考えてるの」

「ああ。こんなこというと萱子はおかしいらしいし、おかあさんにいうと、叱られるがね」

「だから遺言はあと廻しにしましうよ」

少しへんだなど、萱子は感じながら、さらに膝をすすめた。ながい病人特有のにおいが、なれた萱子の嗅覚を刺激する。松三郎はやせた頬にかすかな笑いを浮べ、

「しかしね萱子、一生病人だったおとうさんの考えは少しがうよ。実に淡々として、思い残しはなにもないね」

「なら、遺言なんて、矛盾してるわよ」

がらつと勝手口があき、おこまさんの声で、

「ただいま」

「あ、萱子もどつてたの。よかった。走ってかえったのよ」
まだせわしない呼吸をしているおこまさんに、萱子は、

「まったく、うちのご夫婦つて、手ばなしなのね」

わざとひやかしをいうと、おこまさんはむきになり、

「なにがよ。ひと、馬鹿にしたようなこといいなさんな」

「だって、私が帰るなり、おとうさんはおとうさんで、多

美子オ、おこまさんや、なんだもの。刺戟されちゃうわよ。早くかえって損しちゃった」

そうだったのかと、さっきの松三郎ほどにでれながら、

「なにいつてんのよ。じようだんばかり。こっちはじみやまで足をのばして、おそくなったんじやないの」

しじみ汁は松三郎の大好物である。萱子にはやりとし、

「もうたくさん。あとはどうぞおふたりで」

さつときり上げようとするのへ松三郎は、

「ちよつとまった萱子。おかあさんもすわらんかね」

おこまさんは仕方なさそうに萱子とならんですわり、

「ほんとにだれに似て、そんなざれ口ばかりきくのかね」

まだ萱子にこだわっている。

「さあ、お二方のどちらかでしうね。それとも第二の天性かな。でも別に責任など感じてもらわなくていいのよ」

相変らず萱子はへらず口をやめようとせず、

「それよか、大変なのよ。おとうさん遺言したいんですつて。げんしゆくなんだから、前かけなんかとりなさいよ」

「いいかげんになさい」

おこまさんに肩先を小突かれて、萱子は首をすくめた。

しかし、そんなおどけが、萱子のせい一ぱいの心づかいなのを百も承知の松三郎は、りこうな娘だと内心ひそかに特

みながら、

「まあ、とにかく聞いてくれよ、おかあさん」
となごやかな眼でおこまさんを見上げた。

「ごはんのあとだつていいじゃありませんか。ちよつとおくれても、ましてしほがないくせに」

不服そうにいうおこまさんに、松三郎はいつになくはずんだ調子で、

「いや、問題は今日の晩飯どころじゃないんだ。わが家の浮沈にかかわることなんだから」

「またおとうさんの、大げさな」

気のせく時のくせで、鼻の頭をしきりに袖口でふきながら、

「どうせ、一文菓子屋でもやりたいというんでしょ」

その気のりのしない様子を、一言でくつがえそうとでもいうように、松三郎は、

「アパートなんだよお前！」

「アパート？」

おこまさんはぎよつとし、また鼻の頭をこすりこすり、
「私たちが、アパートへ引っこすんですか」

俵約俵約の合言葉が、家を売り払ってアパート住いをするところまで、松三郎の考えを追いつめたのかと、おこまさんは暗たんとなった。だが、どうやらそれは見当はずれらしい。松三郎の浮いた表情がそれを語っているのだ。松三郎はめったに見せない上機嫌で、

「アパートを、建てるんだよ、お前」

今度は萱子が目を丸くし、

「あら、そんなお金、あるの」

「金がないから、建てるんだよ」

「へえ、へんなの。そしてどうするの」

「その上りで、萱子とおかあさんが暮すのさ」

「おとうさんは」

「おとうさんか。おとうさんはそれまでにかたがつくよ」

「死出の旅路」

「ああ」

「おとうさん、口ばかりでなかなか出発の運びにならないわね」

「ましかねてるのか、萱子は」

「ううん。もうあてにしないことにしてるの」

父娘のやりとりにおこまさんは、憤然として、萱子をにらみ、

「なによ。馬鹿ばかりいつて。お父さんもお父さんよ」

しかし松三郎も萱子もにやにやしているだけだ。生死の問題を日常茶飯と同じように口にして暮してきた親子にとっては、ことに今のように平静な気持ちの時に、むつかしく考える方がこたえる筈だ。それを知らぬおこまさんではないのだが、彼女には彼女なりの理由もあった。急にアパートを建てるなどいい出されたことさえ、これまでの松三

郎には見られぬ思いきりのよさなのに、その、あるいは最後の飛躍かもしれない計画をまで、本人ならぬ萱子が、死とからませる無神経さに腹が立つのだ。今は上きげんなどかいいようなものの、一たび天気が変われば、当りちらされるのは自分だけではないか。

同じように萱子には萱子の思いがある。小さい時から萱子は健康な父の姿をみたことがない。たまに覚えているのは、頭でっかちの、苦渋にみちた顔つきをした、小人のような姿なのだ。勤めに出たり、忙しそうに立ち働いている父親をもった友だちを、小さい時の萱子はどれほど羨やましく思ったかもしれない。せむしの子となぶられて、ひそかに涙をふいたこともある。そんな悲しみにうちかつには、それをじょうだんにしてしまふより手がなかった。そしてついにそれが身についてしまったのだ。

「だってねえおとうさん。せつかくおとうさんが悟りを開いたところなのに、おかあさんたら、おこつたりして」ふん、といったふうにあごをあげた萱子の目がうるんでいる。さすがのおこまさんもだまって台所にさがった。

夕食のときには、三人とも平和な顔をしてアパート建設に議論百出だった。好物のしじみ汁のせいもある、松三郎は甚だ口が軽かった。

「うちのアパートは、ぜったいに子供は困るなんて、いわんことにしようや」

これが最後の家族会議になろうとは、だれも予測しなかった。

気落ちがしない中にと、人にもすすめられるままに、アパート建築に本腰をいれようと決心したのは、松三郎の初七日の夜からだ。なにもかも故人の意志に従って、まさかの時には手離せるよう、住居と地つづきの持ち土地の百坪を区切って、預金の殆どを投げ出してとりかかった。ああかこうかと足ぶみなどしては、ことは運ばない。

思いきって渡りかかった綱は、どうしても渡らねば、落ちて怪我するだけだと、背水の陣のおこまさんは、目をつるし上げていた。松三郎との結婚生活二十年の間、どっかにかくれていた生来のきかん気のようなものが、ふたたび彼女にもどってきたのだ。職人たちに馬鹿にされまい、商人たちになめられまい、親しげによってくる人たちにごまかされまいと、力んでいるようなおこまさんの、肩のこりをゆるめてくれるのが、今のところは萱子だった。

「このごろのおかあさんみてる、こわいみたい」

「うかうかしちゃあ、おれんもの。後家だと思つて、私がちよつと気を許すと、すぐなめてかかるんだからね。油断もすきもならないよ」

「そんなのを、後家のがんびりっていうのよ」

「いいよ。私のがんばらいで、だれががんばるのかね」

「萱子だって、がんばれると思うけどさ、おかあさんたら、